

## 大学生の国語国文学の教養の現状

### 専門課程における教養の現状

—その問題点と対策—

大阪市立大学 塚原鉄雄

わたしは、経験も浅く、また、視野も狭い若輩であります。大阪市大に勤務して、まだ、十三年半にしかありませんし、講壇から接した学生といえ、大阪市大のほか、京都大学、同志社大学といった、限られた範囲でしかありません。そのほか、個人的な関係で、京都女子大学や龍谷大学の学生と話しあった機会もありますが、そんな経験は、まことに貧弱なものであります。したがって、ここで、講師の末席を汚し、壇上に立つことは、その資格に缺けるところがありますよう。

しかし、また、未熟であり、貧弱であるということは、問題の材料を提供するのに、好都合かも知れません。ご批判や

ご助言を蒙ることによって、その効果を意義あらしめることが、出来るでありません。とにかく、未熟は未熟なりに、また、貧弱は貧弱なりに、——否、それだけに一層、苦心し、摸索しているのであります。忌憚のないご指導を仰ぎたく存じます。

そんなわけで、わたし自身の、感じ、考え、行なっております事実を、率直に申し述べまして、ご叱正を戴けましたら幸いです。

**進路の決定** さて、専攻学生の、専門課程における教養の現状ということでありますが、結論ふうに申しますと、ゼロということになります。文法の基礎、文学史の常識といったものも、教養課程の二年間に、すっかり忘れてしまつて、これであら、国文専攻を志望したと、呆れることが少なくありません。

その原因は、恐らく、高等学校の進学指導にあります。う。実力テストの成績によって、この高校で何番なら、何大学の何学部へ、といった具合に、戦争中の配給制度を想起させるような調子で、進路決定の指導がなされております。本

人の適性とか志望とかは、ほとんど考慮されておりません。大学に合格させれば、それで責務から解放されるといった、教育機関としては、実に無責任な処理であります。もっとも、この事実から、高等学校だけを非難することは、正しくないでしょう。その根柢には、社会や家庭の、大学なり、大学進学なりについての考え方がありまして、それを吟味しなければなりません。しかし、いまは、その余裕がありませんので、その事実だけを指摘しておきましょう。

高等学校の進学指導が、こんな状態ですから、生徒の方も、いい加減なものです。京都大学の医学部を志望して、失敗した生徒ですが、入学試験の得点を調べてもらって、法学部を受験すれば合格していたのに、残念なことをしたと、後悔していた例があります。医学と法学と、この生徒では、どう結びつくのか、——戦争中、徴兵猶予の特典が文科系から剝奪されていても、理科系への転向など、夢想さえしなかったわたしどもには、理解に苦しみますが、現在では、珍しい事例であります。

友人がスキーに出掛けるから、わたしも行かねばならぬ。級友のスカートが短いから、わたしも短くする。そこで、友達が大学へ行くから、わたしも、——こういう調子で、大学進学が決定されます。つまり、そういうことになっているから、大学を志望するのでありまして、勉強をしたから進学する、というのではありません。いわば、恰好をつ

けるために、大学があるのであります。

入学できて、卒業できればよい。学部や専攻など、難易の観点から顧慮されるだけである。——それが、一般的な趨勢であります。したがって、国文専攻といっても、外国語が不得意だから、国文なら何とかなるだろう、そういう消極的な理由で志望する学生が、少なくありません。

勿論、例外はあります。女子は文学部、文学部なら英文か仏文、——女子学生とその家族に、共通した傾向であります。これが抵抗して自己を貫ぬいた女子学生もおります。両親は、大阪府立女子大学に入れて、英文を専攻させたがっていました。ところが、女子大では、入学のときに専攻が決定されます。大阪市大では、専門課程になって、専攻を決定することになっているところから、まず、市大受験を諒承させました。そして、二回生の秋に、専攻決定は、自分勝手に提出して、国文の道を選んだのであります。こうなるとは、両親も、反対しなかったそうですが、この学生は、秀抜な卒業論文を残しました。

高校生時代から、国文の勉強がしかなかったのだと、申しとおりましたが、この女子学生など、稀有の例外であります。わたし自身、二三の場合を見聞するに過ぎません。大部分は、その知識にしましても、その態度にしましても、国語国文学専攻の学生として、ゼロから出発するわけでありませぬ。しかも、卒業のときには、それに相応する学力を缺かせられ

ません。

**大学と学問** 大部分の学生にとって、大学とは、就職の前提となる過程であり、資格を獲得するための機関であります。ですから、単位を取得すれば、それでよいわけで、勉強は、取得点を上昇させるためにだけ、必要であるということになります。殊に、近頃のように、就職の心配がないとなれば、勉強などは、試験に落ちさえしなければよいわけです。

要するに、講義に出席し、質問をして、教師から教えられる、——ただ、それだけのことであります。教師は教え、学生は習う、その場所として大学がある。それ以外は、不必要であつて、クラブや学生運動、アルバイトに、時間と努力とを提供しなければならぬ。

これでは、全く、高等学校の延長であります。教える者と教えられる者とが、能動と受動との関係として、固定的に恒常化してしまいます。しかし、学生は、学校、教室というものについて、そのような觀念と習慣とをし、具有していません。これを打破することが、緊要なのであります。

受身の姿勢を克服して、能動の姿勢を形成すること、——こつといった基本的な態勢の確立が、実施されなければなりません。そこで、わたしは、わたしの講義に出席する学生たちに、二つの宣言をし、それを、徹底的に実践しようといひます。そして、そのことに関連しては、一切の妥協を、極力、排除してまいりました。

第一に、大学は、学問するところである、ということになります。大学は、必ずしも、学者を養成するところではない。しかし、学問を離れて、大学はない、ということですが。

このことは、至極、当然のことでありまして、殊更に言及するのが、滑稽なくらいでしょう。けれども、現状は、この認識と理解とを、極度に必要といたします。殊に、人文科学といった、非実用的な学問、——それだけに、学問の名称に、真に適切な学問を専攻する文学部の学生には、重要なことと考えられます。

現代の青年は、實際上の効用とか利益とかに、敏感でありますから、この覚悟が出来ておりませんと、一方では、法経に対する劣等感、一方では、虚無的な浪費感に陥ちいつてしまいます。夏爐冬扇に意義を認知できないのなら、文学部などを去つて、やりなすのがよい。日本中の文学部を抹殺してしまつても、社会生活に、顕在的な影響はないはずである。しかし、法学部や経済学部では、そういうわけにはいかない。そこに、学問に純粹な学部と、技術に連繫する学部との相違がある。存在しないからどうだ、というものではないけれども、存在しなければならぬ、——そこに学問の意味があるので、それを感得できない人間は、少なくとも、国文学を志望しなくてもいい。教師になるためだけにあれば、学芸学部もあるし、教育学部もある。

こつといったことは、創造性の要求を、誘導することになり

ます。学生は、天然録音再生機であつてはいけない。ところが、学生たちは、参考書——それも、高校生向きの通俗参考書を、読みあげればそれでよいといった態度が、骨髓にまで滲透しております。この安易な態度を破壊して、その態度を基礎づけている事大性を打破し、権威の盲信から解放されて、自分で確認しない限り、疑惑を解消しない姿勢を、確立させようとするのであります。

**大学と就職** 第二に、大学は、就職斡施所ではない、ということでありませう。大学を卒業して就職するということは、就職のために大学があるということではありません。大学は、会社や官庁の職員養成機関ではないはずであります。しかるに、学生たちは、実質的にはそうであるように考えて、入学しております。学生だけではありません。事務当局にも、そのような見解が濃厚ですし、教員のなかにも、そう錯覚している人物が少なくないと見受けられます。ですから、この当然至極なことをも、強調しておかなくてはなりません。

大学というところは、入学は困難だが、卒業は容易である。こういった奇怪な意見が、普遍的な事実裏づけられた妥当性を具備することは、否定できないでしょう。そして、その行為において、この意見を確証している大学教員も、実際に存在します。しかし、この事実ほど、大学が、大学自体を軽蔑する行動はないと、確信し、慨嘆いたします。

修業年限が四年ということは、四年在学すれば卒業でき

る、学生は、簡単にそう思っています。そして、四年在学すれば卒業させなければならぬ、教員も、どうやら、そう考えているようです。しかし、大学が、四年の在学中で卒業させねばならないのは、大学の制度と制度の運営とについてでありまして、学生個人については、その個人責任があるはずであります。それを、理念としてはともかく、事実においてでも、大学や教員にあると錯覚するのは、馬鹿馬鹿しいだけでなく、学生を侮蔑した行為と申さなくてはなりません。

出来ない者は落とす、ということでもあります。四年間というのは、在学すべき最小限の期間であるに過ぎない。君たちには、八年間、在学する権利がある。ほくも、安心して落とせるが、君たちも、醜態しないで勉強せよ。こう言って、成績の悪い学生は、遠慮も会釈もなく、ドンドン落第させます。そこで、鬼の大松、地獄の塚原、ということになります。

以前には、しばしば、陳情を受けました。自宅に、坐り込まれたこともあります。同情した友人たちと、数人に囲まれるのは、気味のいいものではありません。大抵は、就職が決定しているから、何とかしてほしい。先生の一目だけなのだから、という理由です。

個人的には、同情してしまつて、内心では動搖することもありません。しかし、わたしは、絶対に承引しません。学生の理性を尊重して、理由を列挙し、帰らせることにします。

第一の理由は、落第点の責任が、学生本人にあることです。得点が、全般的に低いとか、落第者が多数であるとかであれば、教師としての多くの責任である。講義が拙劣であったか、出題が適切でなかったか、採点が無茶であったか、そのいずれにしても、教師に責任がある。しかし、大多数は合格して単位を取得し、しかも、八〇点以上の得点も少なくない。それにも拘わらず、落第点というのは、頭が悪いか、怠慢であったか、原因は知らず、当人の責任というほかない。

第二の理由は、教師としての良心であります。ぼくは、チャラッポコな教師かも知れないけれども、最低限、人間として可能な限界で、すべての学生に対し、公正であろうと努力している。特定の個人に対してだけ、特別の配慮をすることは、同一条件で評価した多勢の学生たちを、ペテンにかけることになる。ぼくの認定は、インチキだということになる。そういう不正は、絶対に出来ない。

第三の理由は、学生の良心であります。現在までのところ、教員志望の学生が多かったのですが、そういった闇取引をして教師になって、良心に恥じるところがないのか。罪の意識を持たないのか。そういう人間が、教壇に立つ資格を持つといえるのか。ぼくは、ぼくの能力で、そんな人間が教壇に立つことを防げるとすれば、一人でも喜びとしたい。

第四の理由は、大学は、職業補導所ではないということであります。就職が決定したといっても、それは、卒業を見込

んでのことである。卒業できない学生の採用を決定したのは、先方の不明でしかない。また、落第したのは、先方の信頼を裏切ったことである。それだけのことであって、いま、落第した学生に単位を与えれば、更に、先方を欺くことになる。馬肉の罐詰に、牛肉のレッテルを貼るに等しい。そんな卑劣な行為が出来るものか。

大体、こんなところですが、これで、学生は、悄然と帰って行きます。感情的に、わたしも、愉快ではありません。さぞ、怨んでいるだろうと、心中、いささか穏やかでないこともあります。ですが、やはり、わたしの真意を理解してくれるようです。

数年前のことですが、ある地方に、講演旅行に出掛けました。懇親会の席で、わざわざ、末席から挨拶に来た青年がいます。その春に、落第させた学生でした。学校長が、人物を見込んで、手続中ということで、仮採用にしてくれたといえます。当座は、エゲツナイ奴だと腹が立ちましたが、教壇に立って生徒に接してみますと、仰言ったことがよくわかります。ありがとうございました、と、落第させて感謝されました。こういうわけで、自信をもって落第させますが、最近では、そういうものと、学生間に徹底し普及したようので、闇取引の陳情は、すっかり、跡を断っております。

実証の徹底 さて、このような現状の認識と姿勢の形成とを前提としまして、わたし自身の実践を披露いたします。対策

といえますかどうか、ご叱正とご助言とを、お願いいたしました  
いと存じます。

高校教育の惰性でしょうが、学生は、研究するか、考  
るとかいうことを、実に、安易に理解しています。学習で  
かないことを、研究と名づけたり、感じただけなのに、考  
たと表現したりする、奇怪な習慣が残っているのです。「わ  
たしの考えでは」などということ、臆面もなく申します。  
しかし、考える材料が、極度に貧弱なですから、一寸した  
思いつきでなければ、印象的な感じではありません。

空っぽの頭で考えても、何も出て来ない。まず、頭の中  
詰めてから考えよ。——そんなふうにとりまわして、徹  
底的な実証作業を要求します。そのためには、辞書を丹念に  
調べること、資料を確実に読むことを、厳重に要求する  
わけです。

ところが、学生たちは、辞書といえば、高校時代に買っ  
た、小型の辞書しか引きません。漢和辞典、康熙字典とい  
った画引きの辞書は、引き方から指導する必要があります。こ  
れでは、まるで家庭教師ではないか、そういつて苦笑するの  
ですが、こういったところから、倭名類聚鈔、類聚名義抄と  
いった古字書を活用できるまで、具体的に指導しなければな  
りません。新撰字鏡あたりになりますと、本文の文字が判読  
できませんから、これにも、個人指導が欠かせません。マ  
ス・プロ教育でないから出来るようなものの、講義時間を費

すわけにはまいりませんし、出講日の昼食は、抜いたり、三  
時過ぎとなったり。

でも、よくしたもので、秋頃になりますと、こういった字  
書類も、何とか利用できるようになります。全員というわけ  
にはいきませんが、大体、わたしの講義は、特別に優秀  
でなければ、一年では落第としてありますから、単位を取得  
する頃までには、何とか、恰好がつくようです。

しかし、辞書を検索して、それを探り当てただけで  
は、まだ、十分ではありません。別の辞書によって確認し、  
また、別の資料をも考慮することが大切であります。その作  
業を、可能な限り、徹底させるわけです。

例えば、「ひつ」という動詞があります。現代語の「ヌレ  
ル」「ヌラス」に相当する言葉で、普通は、「ひづ」とされ  
ております。けれども、中田祝夫博士が指摘されましたよう  
に、図書寮本の類聚名義抄によれば、この動詞の語尾は、清  
音であります。しかし、その事実だけで、清音と決定するに  
は、十分とは申せません。観智院本や高山寺本では、そのこ  
とは判明しませんし、濁点の脱落も、ありえないといえま  
せん。

ですから、この資料だけで清音だと申しましたが、そのま  
までは、却下します。日葡辞書に「Fichi, tçuru, chita」と  
あることを確認して、この妥当性を、確認するわけでありま  
す。自讃して、ウルトラ・Aと申しますが、図書寮の名義抄

にある清音の表記は、それより後代の日葡辞書が清音であることよって、それが一本であるにも拘わらず、保証されるわけでありませぬ。作業を、そこまで徹底しないことには、完全とはいえませぬ。したがって、そこまで要求いたしません。

辞書以外でも、資料を実証することには、入念な作業を課します。わたしは、昭和三十三年以来、土佐日記の講読を担当しております。六年かかって、やっと、和泉の灘あたりにまでまいりましたが、帰洛するまで、来年一杯はかかりそうです。土佐日記をテキストにしましたのは、短いものですから、学生の予習に、毎週一回は、全編を通読できるということがあります。したがって、常に、部分を、全体との連関において吟味しやすいということがあります。

進度は、このように遅遅としておりますが、その代わり、一語一句に、細心の注意を払い、傍証として、上代から平安朝にかけて、大体は源氏物語までですが、その間の文献を利用させます。とにかく、学生は、土佐日記を調べるといふことで、少なくとも活字になっているような古代の文献を、読まないわけにはいきませぬ。つまり、多読と熟読とを兼ね、国語国文学専攻の学生として、わたしの担当する範囲で、常識と教養とを具備するとともに、学問するという態度を、形成しようとするわけです。

全員とまではまいりませんが、学生たちも、興味が湧いて来るらしく、夜間に至るまで、調べ物に熱中しております。

学生でも、専門の学者が到達していないところを、微細であるにせよ、解明しようということ、——それが、喜びと自信とを与えて、勉学の面白味が、体得されるのであります。う。

いわば、マン・トゥ・マン方式による、ハード・トレーニングであります。ただ、残念なことに、近年、こうしたわたしの鍛錬を、積極的に受けようとするのが、女子学生ばかりでして、他人の嫁はんの世話をしていることになりました。小泉信三の庶民版だと、みずから勉めてはおりますが……。

**突感の再現** ところで、実証作業を徹底的に実践するとしましても、それだけで、古典が、把握できるものではありません。観念的な知的認識は、可能でありませう。けれども、人間的な理解にまで、到達することは出来ませぬ。

それが実現しなくては、何の文学かということになります。文学作品をテキストとする意味が、殆んど、ないわけです。わたしは、国語学が専攻ということになっておりますけれども、言語についても、看過してはいけないことであります。

しかるに、学生は、古典のなかに、共鳴する実感を捕捉することは、極わめて困難のようであります。その原因の一つは、古典の原文そのままでは、学生たちの実感を誘発しがたいということにあります。しかしながら、注釈書類の説明が、学生の現実との相對關係から批判しますと、頗る不親

切だということが、指摘されなければなりません。

学生たちの、生活の実感に憑えることによって、——生活の実感に憑えるように説明することによって、隔絶された世界のように印象づけられている、古典の世界と学生の世界とが、容易に結びつくのであります。そうした指導によって、学生たちの疎外感、解消することが可能でありますし、興味と情熱とを抱だいて、古典の究明に、現実的な意味を把握いたします。

実例で申しますと、源氏物語の梅が枝に、薰物競べがあります。光源氏が、「この夕暮のしめりに心みん。」と言いまして、春雨の夕暮に、実施される薰物競べなのですが、この場合、一般には、「香は湿っていると匂いが勝る。」といったふうな説明が、なされているようです。けれども、学生たちにとって、こういった程度の説明では、ああ、そうか、ということ、実は、何も理解できておりません。そういう知識が、脳細胞の片隈に、蓄積されるだけに過ぎません。

薰物について、全然、知らないばかりでなく、嗅覚一般について、無神経な生活をしているのですから、仕方がないと申せましょう。嗅覚感覚が、鋭敏で繊細であれば、現代の都市生活は、成立しないといっても、過言でないのが現実的なです。街頭も交通機関も、悪臭が充満しています。自然と、それらに無神経であるように、習慣づけられているわけです。湿度が嗅覚に関与するといっても、そんなものかなあ、と

いうだけのことであります。

ですから、こういう場合には、学生たちが、経験し、また、意識していながら、しかも看過している事実を発掘し、それを指摘することによって、気づかせることが、肝要となつてまいります。Ame no huru Hi wa Benzyo ga

Kusai.——こう、一言だけ指摘してやれば、なるほどと、自分の実感に結びつけて、わざわざ、春雨の夕暮が、その時期として選定された理由を、理解し納得するのであります。

理解と納得とだけではありません。古典を基礎づけている感覚が、自分の感覚と、隔絶されていないことを実感し、古典への興味と共感とを基盤とする探求が、拓かれて来るのであります。もっとも、こんなふうの説明しますと、学生たちは、ウルトラ・Hだなどと申しますから、古典の尊厳ということ、形式的に主張したい向きには、ケシカランということになりましょう。

万葉集のなかに、大津皇子の辞世があります。「百伝磐余池尔鳴鴨乎今日耳見哉雲隱去牟」(卷三・四一六)であります。が、刑死の直前に、磐余の池の堤で、詠作された作品であります。

この作品では、鴨が、重要な意味を荷担しております。もっとも、一般には、そのことが、指摘されていません。万葉の専門ではありませんので、見落とした研究文献で、詳説したものがあのか、それは知りませんけれども、通常、説明

されていないようです。

鴨が重要だと申しますのは、この鳥が、候鳥——渡り鳥だということであります。そういうことを、現代の学生は知りませんし、また、そういった説明にも、なかなか、触れることがありません。万葉の注釈に専従する学者には、説明を必要としない自明の事実なのでしょう。しかし、自明であるだけに、その意味を捕捉しかねていると申せば、失礼になりませんか。

日本書紀によっても確認できますが、万葉集本文の左注にも明記してありますように、この処刑は、冬十月でありました。ということは、夏や秋には不在であった鴨が、この磐余の池に、帰って来ているわけです。寒くなって、帰って来た鴨なのです。

作者である大津皇子は、刑死という不帰の旅出を目前にしています。というより、その旅行は、もはや、始まっているのです。暖かくなるときに、北国に去った鴨は、いま、ここに帰って来ている。それに比較して、自分は、去って帰らない旅に出発する。それだけに、悲痛哀切の情が、深刻なのであります。

すなわち、鴨は、季節の景物にとどまるものではありません。その生態が、この作品のなかで、抜き差しならぬ絶対的な意味を、主張しております。雀や鳥では、こうはなりません。

どうも、注釈といえますと、動物や植物については、分類学的な解説で満足する傾向があります。しかし、文学で必要なのは、生態論的な説明であります。ところが、それは、大抵の場合、なされてはおりません。年輩の学者にとつて、それは、自明の事実であり、説明することだけで、滑稽なのだったかと想像されます。けれども、そうした常識であることが、一種の盲点となったことも、事実のようであります。

現代の学生は、動物や植物について、恐ろしく無知であります。呆れるほどの非常識であります。したがって、その説明が必要です。都市の学生については、格別に、その必要性が加重されましょう。しかし、それだけに、かえって、先人の盲点を指摘して、適切で確実な理解に到達します。教養がゼロだなどと申しましたが、それは、教養を蓄積する機会が与えられなかったからなので、素質が低下しているということでは、決してありません。

**論理の発掘** さて、生活の実感に憩えると申しましたが、そのことはかりを強調しますと、恣意的な主観を、独善的に主張することになります。殷鑑遠からずで、着実な実証に基礎づけられながら、判断の段階になりますと、主観的な印象によって、恣意的に処理されてしまう事例は、専門学者と呼ばれる人たちの業績にも、むしろ、多いのであります。

こういった誤謬を回避するために、二つの配慮が、なされ

なければならぬと考えます。第一に、原典の論理を發掘することであり、第二に、原典の歴史的背景を把握し、歴史的背景との連繫において、原典を認識し、理解することにあります。

論理的に認識する、あるいは、論理的に理解する、——そう申しますと、とかく、現代の論理を、原典に適用する傾向があります。しかし、それは、極力、排除しなければなりません。もし、ここに、現代というものが、介入しようとすれば、それが、現代の研究であるということであり、換言すれば、原典の論理を、現代で説明するということではありません。そうすることによって、過去が現代に結合するわけです。ですから、それは、肝要なのでありますが、そのことを、現代によって過去を理解する營為から、峻烈に區別しなければなりません。両者の混同を排除することが、研究態度を形成する基礎になります。

宇治拾遺物語に、「蔵人得業惠印猿沢の池の竜のこと」という説話があります。その鼻が、赤くて大きかったので、「鼻蔵人」とか、「鼻蔵」とか呼ばれる僧侶がいました。これが、蔵人得業惠印であります。

この惠印が、若い頃、猿沢の池の辺りに、立札をいたしました。某月某日、この池から、昇竜のことがあるというのです。そこで、是非とも、それを見たいというわけで、諸国から、老若男女が集まりました。ところが、当初は、そういう

群衆を、軽蔑していた惠印でしたが、あまりに見物が多勢なので、何か子細があるに相違ないと、猿沢の池にまで出掛けます。しかし、やはり、竜は昇りませんでした。

その夜、惠印は、一本橋の上で、盲人と衝突しそうになります。「あっ、危い。盲だ。」と言ったところ、その盲人が、「そうではない。鼻暗だ。」と言った。惠印の渾名を知らない盲人が、「はなくら」を言い当てたので、おかしいことの一つだと、いつています。

ところで、この説話には、分裂があると批判する意見があります。前半は、心理の機微を的確に把握して、近代文学にでも通用する。しかるに、後半は、語呂合わせの駄洒落に過ぎない。そういった趣旨の批判であります。

ですが、わたしは、そうは思いません。詳細な論証は、以前に公表したことがありますので、ここでは、簡単に、結論めいたことだけを申し上げます。この説話のテーマは、事実と認識との相関関係であります。

説話の前半は、真相を熟知していることによって、事実を把握しないことがあることを、惠印によって実証しております。そして、説話の後半は、事情を知らない盲人が、「はなくら」という事実を捕捉します。すなわち、事実を十分に知りながら、事実を誤認する場合があります。対して、事情に全く暗くても、事実を指摘することがありうる。これは、知っているがゆえに、事実を捕えそこね、事実でないものを事

実と見るといった、皮肉な人生の眞実性を、基礎づけており  
ます。

しかも、この説話では、一人の法師において、同日に前後  
して、全然逆の経験が実現した、——そこに、滑稽と妙味と  
があったわけです。したがって、前半と後半とは、この説話  
において、相互に、表裏一体をなし、密接不離の関係にある  
と考えられます。

前半だけであれば、青年客氣の悪戯を物語る、いわば愉快  
な話ではありません。また、後半だけなら、単なる語呂  
合わせで、低級な駄洒落でありましょう。しかし、両者が統  
一されることによって、ここに、作者の人生哲学が提示され  
ております。それを発見することが、この説話を、客觀的  
に、認識して理解することになるのではないのでしょうか。

なお、このテーマは、芥川竜之介の「竜」という作品で、  
更に發展させられております。その分析は、保留するとし  
ましても、芥川は、この説話を、このように把握し、それ  
を前提として、その作品形象を、実現させたと推定しなけれ  
ばなりません。素材は、前半だけですが、テーマは、全体  
を、確實に把握し、人間の認識とは、事実の投影ではなく  
て、事実を媒材とする主体の構成である、——そういったふ  
うな思想に、發展させられております。これは、説話の前半  
を正とし、その後半を反とする、弁証法的な帰結としての合  
を、作品として形象したといえましよう。

ところが、国文学者の側から、かえって、近代主義的な観  
点からの、皮相な裁断批評がなされております。それらは、  
安易に、学生の共感を誘発するものでありますが、原典の論理  
を發掘することによって、より一層、その内容を、豊かに把  
握させることが、可能となります。時代を超越した人間とし  
ての興味から、古典に対決する学的意欲を、醸成し、助長す  
ることになります。

**背景の吟味** 原典の論理を發掘すると申しましたが、実際の  
作業からしますと、發掘した論理が、果たして、原典のそれ  
であるかどうか、確認しなければなりません。そのために  
は、原典を基礎づけている歴史的背景を、正確に把握し、そ  
れとの連繫において、確認される必要があります。背景の吟  
味ということが、缺かせません。

歴史的背景の吟味と申しましても、いわゆる歴史学の成果  
を、導入して摂取するというだけではありません。そ  
れも、無論、重要なものではありますけれども、国語学なり、  
国文学なりの領域で、考察し、吟味しなければならぬこと  
が、多々あるのであります。それを、苟且にいたしますと、  
一見、もっともらしい見解でも、主観的な嗜好による歪曲で  
しかないことが、しばしばあります。

紀貫之が、土佐日記を執筆しました時代、「日記」という  
言葉には、二種の外延がありました。その概念の内包は、事  
実の記録ということでありますが、この内包を共有すること

で、対立する二種の外延が、存在したのであります。

第一種の日記は、筆者が男性でありまして、形式的に日次記であり、内容的に実事記であり、文体的に和様漢文でありました。そして、そのテーマは、主体によって設定され、設定されたテーマによって、記録の対象となる素材が選択されます。公的な事務とか、私的な身辺とか、テーマの設定が、執筆の動機となります。

第二種の日記は、筆者が女性でありまして、形式的に日次記でなく、内容的に実事記であります。文体的には和文体でありました。そして、そのテーマは、歌合の記録というふうに、記録対象となる素材によって、規定されておりまして、つまり、テーマの設定は、素材としての事件を成立させるわけで、日記のテーマは、その素材によって規定されているわけであります。

土佐日記の成立する背景には、こういった事実がありまして。そして、この二種が、ともに、日記と呼称されていたのであります。

ところで、貫之は、土佐日記を執筆するときに、女性という観点に立脚します。したがって、女性の観点からしますと、……女性が日記を書くことは珍奇ではないのでありますから……、男が日記を書く習慣は、「男もす」と、係助詞「も」で表現しなければならぬこととなります。しかし、それは、第一種の日記でありまして、第二種の日記を日記と

する女性の観点からしますと、それは、「日記といふもの」であって、「日記」ではない。つまり、単に「日記」とだけいえば、第二種の日記である。しかし、第一種の日記をも、世間では、日記と呼称しております。そこで、「男も」と書き、「日記といふもの」としたのであります。

ですから、貫之が、女性に仮託して執筆しようとしたのは、「日記」ではなくて、「日記といふもの」であったのです。換言すれば、女性が筆者とする第一種の日記を、実現させようとしたわけでありまして。したがって、「女も」と、ここでも、係助詞「も」を使用したのであります。そして、ここで実現したのが、女性が筆者で、形式が日次記で、素材によって規定されたテーマによる、和文体の日記、……すなわち、土佐日記ということになるわけです。

第一種の日記を、第二種の日記として実現したのが、土佐日記で、そのことを、貫之は、冒頭で宣言したと申せましょう。その意味で、土佐日記は、女性による和文体の日次記、大后御記と、本質的に相違しております。大后御記は、第一種の日記を、和文体で記録したただけのもので、いわば、男性日記の女性版ではありません。

このように、歴史的な背景を吟味し、それを確実に把握しますと、世上に流布しております議論で、根拠のない俗説が、あまりにも多いことに気づきます。一例を申し上げますと、助動詞「なり」について、通称、伝聞推定説というのがあり

ます。活用語の終止形に接続する助動詞「なり」の意味は、伝聞または推定だとする意見であります。この見解を主張する場合に、例証として、土佐日記の「男もする日記」という本文が、引用されることがあります。

作者は、女性に仮託され、女性の立場から発言している。したがって、男性の日記については、直接に知るところがない。すなわち、伝聞の助動詞「なり」を使用して、「男もする」と表現したのである。——大休、そういったふうな論旨となります。

まことに、条理の整然とした説明でありまして、学生たちは、即座に感服し、それを信奉してしまいます。今日の趨勢では、伝聞推定説が、多勢派を構成しているのですから、学生だけを批判することは、正当ではありませんまい。しかし、学問の世界で、信者というのは、天国の悪魔、メフィストフェレスよりも、始末に困りましょう。

そこで、説得の論理と論証の論理との説明が必要になります。説得の論理として卓越していることは、論証の論理として正確であることを、保障することにはなりません。これを弁別することが、学的態度を形成する第一歩でありましょう。その材料に、これは好適であります。それに、学問の歴史を回顧いたしますと、多数派というのは、学界では優勢ですが、後世に、その誤謬を露呈することが少なくありません。そして、少数派が正確であったことが、証明されます。もっとも、少数派であることは、正確であることの保障には

なりません。しかし、学問するものが、支持の多少で、その動向を左右されるのは、その基本的条件に、甚だしく欲如すると断定してよいわけです。

こうした基本的な態度から、再検討いたしますと、歴史的な背景の吟味から、土佐日記の冒頭が、伝聞推定説を基礎づける資料として、積極的な意味を具有しないことが、明瞭となります。勿論、この一事だけで、伝聞推定説を否認することは、暴挙といわなければなりません。しかし、土佐日記の、この部分に関する限り、伝聞推定説を否定する方向が、示唆されると申しても、過言とはならないでしょう。

紀貫之によって設定された土佐日記の作者が、女性であれば、この冒頭には、あまり、意味がなくなります。そして、土佐日記の創作活動は、このような宣言を必要とするほど、割期的な意味を、具有しなかったことになります。そして、もし、そうであれば、この冒頭は、その歴史的背景からして、ナンセンスと申さなければなりません。

こういったようなわけで、実証の作業も、実感の再現も、そして、論理の発掘も、すべて、歴史的背景を吟味し、それと関連づけることによって、科学的に定着されることとなります。そんなことをやっておりますから、土佐日記の講義に、数年を経過して、なお、前途は遙遠です。しかし、そのことで、学生の視野が、狭隘になるのではない、むしろ、拓

大することは、ご推察いただけるであらう。

また、学生に、過重な負担となりはしないか、——そんな懸念も、あるかと思いますが、決して、そんなことはありません。少なくとも、わたしの直接に接触する学生たちは、それぞれの能力による差異は免れませんが、その心掛けや態度においては、一致した方向性を共有しております。わたしの強力な要求に、即応してくれております。

まことに雑駁な発表でありましたが、わたし自身の、個人的な経験と、個人的な実践とを申し述べることで、課題に対する責任にお応えいたしました。ご批判とご助言とを、お願い申し上げます。